「魚を与えるのではなく、魚の釣り方を教えよ」

校長　長野　秀樹

この言葉は、教育の世界ではよく出てくる言葉の一つです。

中国語では『**授人以魚　不如授人以漁**(ショウ レン イー イュー、プー ルー ショウ レン イー イュー)』と言われ、「人に魚を与えると１日で食べてしまう。しかし、人に釣りを教えれば生涯食べていく事が出来る」と老子（中国春秋時代における哲学者）が言ったとされる言葉です。

お腹を空かした人がいた場合、魚を与える事は一時的な空腹を満たすためには簡単な方法ですが、それでは、その人は空腹になる度に誰かを頼り、魚をもらい続けなければならないし、もらい続ける癖がついてしまいます。

それに対して、釣りの道具を与えて魚の釣り方を教え、実践して身に付けてもらえるようにすれば、空腹になっても自らの力で魚を捕まえて食べられるようになります。もちろん、目先の困難を助けることも時には大事ですが、「相手のためには何が１番か？」を考え、教えてあげたり、環境を作ってあげたりすることが大事です。

「答えはその人の中にあり」と言われます。教えるのではなく、自分自身で気付く事がとても大切だとされます。答えを知っている者からすれば、答えを教えるのは簡単ですし、単刀直入に言いたくて、もやもやすることもあります。しかしそこをぐっと堪えて、相手が自ら気付き、学ぶ機会を奪ってはいけないというのも教える立場の人の役目です。

子供から「これってなあに？」と聞かれ、簡単に答えを教えてしまうのは、子供の考える力を育む意味で、成長の機会を奪う場合もあります。

質問と答えの間には「疑問」があり、「なぜ？」「どうして？」「どうやって？」という過程があります。答えを教えてしまうことで、頭を使い考える習慣を飛ばしてしまうのです。答えを簡単に知る習慣を続けることで思考停止状態になり、思考力、創造力などが育ちません。

学校では、学習や学習以外の場で、すぐに答えを教えるのではなく、子供が自分で考えられるように仕向けています。ご家庭におかれましても、子供が「これってなあに？」と聞いてきたら、「なんだと思う？」と聞き返し、考える習慣を付けさせたいものです。困っていたら、すぐに答えを教えるのではなく、一緒に解決方法を考えるようにしていただきたいと思います。